

半分引きこもり



なすがまま

半分引きこもり

1 歓喜

――妊娠した？

生理が遅れている。結婚して半年が過ぎていた。

その日、仕事から帰った真司に話すと、「やったー！」とガッツポーズを取って喜んで言う。

「で、いつ？ いつ？ 俺はいつ父ちゃんになるんだ？」

「せっかちなえ、まだ確定した訳じゃないわ。明日、病院に行ってくる。だから、お義父さん、お義母さんには、まだ言わないでよ」

階下にいる義父母には、妊娠が確実なものとなってから言いたいと思う。後から、違いましたと言って、ぬか喜びなどさせたくはない。そんな彩の思いを深く理解したかは分からないが、とにかく真司も同意した。

「なーんだ、そっかあ、うん、分かった。うははははー、とうとう俺も父ちゃんか、すげえ」

「だから、まだ確定してないって」

「男かな、女かな？ 彩はどっちだと思う？」

「だから、まだだって、でも、私は女の子が良いから、女の子」

「うーん、俺は、やっぱ男が良い」

まだ見ぬ赤ちゃんの空想は楽しい。

「でも、もしも女なら、彩に似ていて欲しいな、俺」

「男の子なら、あなた似でね」

ふたりは互いの顔を見詰め合って、微笑む。そうやって楽しい空想を延々と続けた。

翌日、病院での検査の結果、妊娠は確実なものとなった。病院からの帰り道、自然と笑みがこぼれ、すれ違う人の怪訝そうな視線を受けて歩く。

バス停で真司に絵文字をいっぱい入れてメールを送った。程なくして返ってきた真司からのメールは、ハートと音符マークがいっぱい並んでいる。

家に帰れば、真司の帰りが待ち遠しくてたまらない。

やっと帰って来た真司は、満面の笑みに声を弾ませ、両手を広げ、彩を抱きしめた。

その日、ベッドの中に入っても、真司の喜ぶ声が耳に残っていた。目を閉じれば、抱きしめられた感触も思い出せる。

次の日から、ふたりは何をしても、楽しい時間を共有した。ふたりで楽しい空想をしては喜び、笑い合った。

それは次の日も、また次に日も――

検査を受けたのは、出産への不安を一つでも取り除いておきたかったから――。日を追うごとに、妊娠の喜びが増す分、出産への不安が大きくなったから――。

幸いにも、ここの病院には、その検査が出来るとインターネットのホームページに記されてい

るのを、何度も確認していた。

何回目かの妊婦検診の日、そう十二週を過ぎた頃だった。担当医に羊水検査を受けたいと伝え、
「若いので、その必要は、ないでしょう」と、取り合ってはくれなかった。けれど彩は「
安心して出産を迎えたいので、どうしても」すがつた末、漸く担当医が折れ、「まあ、そんなに
不安なら、それを無くして、出産に備えるのも良いかも知れませんね」と、手はずを整えて、検
査となったのである。

そうして、十五週と三日目の日に、胎児の染色体異常の有無を調べるため、羊水検査を受けた
。

検査終了後、担当医が「若いから大丈夫だとは思いますが。なので、中間結果は聞きに来なくて
も良いでしょう。最終結果が出るのは四週間後となります。その辺りの定期健診の日に、検査結
果を知らせるようにしましょう」と言った。

予約していた定期健診の日、羊水検査の結果確認も兼ねて出かけた。

2 陽性

羊水検査は破水する恐れがあるとも聞いていたが、何も起こらない。

それどころか、先週辺りから、胎動を感じる。昨夜は、彩のお腹に耳をくっつけていた真司
にも、それが伝わったらしく、「おー！」と、感動の声を発していた。

病院では、体重測定、血圧測定、検尿、血液採取、超音波検査を、いつもと同じように受ける
。そのあと医師の説明を聞く。今回はそこに羊水検査の結果確認が加わる。

羊水検査を受けたというだけで、彩の抱える不安は小さくなっていた。その上に、お腹の中で
元気に動く赤ちゃんからの声、胎動である。検査を受けなければならない年齢でもない。彩は安
心して結果を待つ。

「どうですか？ もう、胎動を感じますか？」

「はい、動いています」

「そうですね、赤ちゃんは、とても元気です。心拍にも問題はありません。ただ、羊水検査の
結果が陽性で、ダウン症を示す数値が出ています。確立は、九十四パーセントと、かなり高い数
値です」

「……？」

彩の視線の先には、今しがた撮ったばかりのエコー画像、そこには小さな赤ちゃんが映って
いる。全回に見たときよりも大きくなっている。小さな手を口元に添えているらしい。

「帰って、ご主人と、よく相談してください」

頭の中が真っ白になる。血の気が引いて、頬の産毛がざわつき、浮き立っていく。カーツとし
てくるが、手が、指が冷たくなってゆく。担当医が時々、彩の顔を凝視する。そしてまた繰り
返し、ゆっくりと喋る。彩には、その説明が途切れ、途切れに届く。届かない言葉もある。

「数字が低くても……ダウン症であることは……あります。逆に高いと……間違いなく……ダウ
ン症児です」

「……そ、そんな」

「生まれてくる赤ちゃんには障害があるでしょう……中絶するなら早いほうが……けれど、ダウン症児だからと言って、中絶するだけが賢い選択という訳でもありません。帰って、ご主人と相談して決めてください」

「……はあ」

「妊娠期間も二十週と進んできましたから、中絶するなら早く決断を……これは妊娠中期中絶の注意点と心得、当病院の手順を書いたものです。よく読んで、ご主人と、しっかり相談してください……中絶するなら、この用紙に、ご主人のサインを……とにかく早く決めて……」

何が何やら分からぬままに、渡される書類を手にする。看護師が「こちらへ」と声をかける。導かれるままに診察室の外へと、夢遊病者のような足取りで出る。

幽体離脱でもしているかのような感覚で会計を済ませ、病院の外に出る。大通りまで出たところで、吐き気が襲ってきた。

——悪い夢？ それも吐き気がするほどに。

つわりの期間は終わったはず。けれど、今また、吐き気が彩を襲う。道端で手を口に当てたとき、もしかしたら悪い夢も一緒に出るんじゃないか？ そんな気がして、道路脇の植え込みの陰にしゃがみ、吐いた。

酸っぱい胃液だけが出たあと、少しばかり落ち着くと耳の奥が「ぐわーん」と鳴った。その雑音の間から、さっきの担当医の声が「ダウン症です」と、繰り返している。

低い背丈のこんもりとした植え込み、その真ん中に背の高い街路樹、それが規則正しく並ぶ大通りの車道と歩道の境界。高い木の若葉から漏れる陽の光が、歩道にこぼれている。朝、歩いてきた時には、キラキラと輝いて見えた。

だが今は、恨めしい。陽の光さえもが疎ましい。

3 苦悩

——どこをどうして、帰り着いたのだろうか？

習慣だけを頼りに戻って来たらしい。家の鍵を開け、無言のまま二階に上がる。物音に気付いた義母が、何かを言ったようだが、彩は応えない。

彩夫婦は、真司の両親との同居である。家は玄関が一つだから、二世帯住宅とまでは言えないだろう。トイレは各階に備わっているものの、バスルームはひとつ、広いリビングキッチンも共有。その一階の和室、二部屋を義父母が使い、二階部分にある三部屋すべてを、彩たち若夫婦が使っている。

三部屋のうち二部屋は続き部屋で、大きな三枚の引き戸となっているので、ふたりのリビングと寝室。その寝室には二畳ほどの、ウォーキングクローゼットが付いている。廊下をはさんだもうひとつの部屋は、子供ができたときに使う予定で、今はほとんど空き部屋である。

階段を上がりきり、左側にあるふたりだけのリビングに入ると、途端に涙が溢れた。

目の前に見える長ソファに向かって歩き、持っていたバッグを手放し、ソファに身を預

ける。シートにあった小ぶりのクッションを抱き寄せ、腰を回転させ、肘掛に頭を乗せた。

涙でかすむ天井を眺めると、「障害児」という言葉が、繰り返し繰り返し、聞こえてくる。テーブルの下へと手を伸ばし、そこに置いてあるティッシュの箱をつかんで、胸の上に置く。連続二回ティッシュを抜き取り、涙と鼻を拭き、独り言をつぶやく。

「何で、何でよ」

お腹に手を当てて、問いかける。「何事？」と、言うかのようにお腹の中で赤ちゃんが動いた。

動いた赤ちゃんが、今は違うもの変わったような気がした。検診時のエコー画像は紛れもなく、小さなあかちゃんだったにもかかわらず……

階下から義母の呼ぶ声が聞こえる。けれど返事をする気力はない。じっと、クッションを抱きしめ、「何で、何でよ」と繰り返していた。

そうするうち、小さな子供のように泣き疲れて、彩はまどろんだ。

不意に真司の声が聞こえて、はっとした。彩は自分が眠っていたことに気付いた。ぼんやりする意識の中には暗闇が見えた。

——うん？ もう夜なのか、寝てたんだ、私。

彩が身体を起こすのと同時に、真司の怪訝そうな声をはっきりと聞こえる。

「こんな暗がりは何してんの？ 寝てたの？ 彩、電気、点けて」

言われて、彩はテーブルの上にある白いリモコンを取り、リビングの電気を点けた。急に明るくなったリビングは、異常なほどに明るく眩しい。

「おかえり、うん、そう、寝てみたい」

ホンの数秒間、平穏なときが流れた。そう、真司が喋りだすまでは——。

「ただいま。今日、病院に行ったんだろ？ 帰って来てから、何も言わずに、部屋にこもってる、って言って、母さんが心配してた」

一気に悲しみの渦の中に落ちてゆく。涙が溢れそうになるのを懸命に堪える。

耐えるのに全神経を使うから、億劫で立ち上がれない。真司がスーツを脱ぐのを呆然と見つめる。妊娠が分かってからは自分で、スーツをクローゼットに仕舞うようになっていた。今も歩きながら、片付けながら訊く。

「しんどいの？」

「うん、ちょっと……」

真司はウォーキングクローゼットから戻り、ワイシャツの前ボタンを外しながら、向き直る。

「母さんが、ご飯、できてる、って言ってた」

「食欲がない、今は食べたくないの……、ひとりで食べてきて……」

「そう、でも、ご飯、食べないと、また母さん、心配するよなあ——」

つわりの症状が出てから、何度か、そんな事がある。真司は無理強いはいしないが、母親への説明だけは煩わしいと、何度となく言った。今回もそんな思いをにじませている。それが分かる彩

も立ち上がろうとしたが、義父母の顔が浮かんで、重い気分になり身体が動かない。

「やっぱ、だめ、ひとりで食べてきて」

「しんどい？」

「うん、まあ、でも、こうしていれば、大丈夫だから」

ジャージの上下に着替えた真司は、渋々ながら納得して、階下へと降りて行った。

ひとりになると、力が抜ける。四方からくるら重い空気の圧力を感じる。時の圧力も重なる。食事を済ませて、戻ってきたら、話さなければならない。言えば真司もショックを受けるだろう……。

また涙が溢れた。

4 伝言

「落ち着いたら食べて、母さんが」

小一時間ほどして真司が、お盆を持って戻り、リビングのテーブルの上に置く。

ソファに座ったままの彩は、目の前に並んだお盆の上の、ご飯とおかずを見ると、涙が一気に溢れてきた。あとからあとから、止めどうもなく溢れる。

「な、何？ どうしたの？」

驚く真司に、泣きながら嗚咽の混じるか細い声で、「赤ちゃんが、赤ちゃんが……」そのあとに続く言葉が出てこない。

「何、赤ちゃんが、どうしたの？」

彩も伝えようと、「赤ちゃんが」と、言うのだが、そのあとの言葉の代わりに、「ぐわー」という声だけが漏れる。

「何、何なの、言ってくれなきゃ、分かんないよ」

泣くばかりの彩に、真司は苛立ち始めていた。

漸く、嗚咽交じりに鞆に入れたままの説明書類を出し、言われた経緯を話した。泣きながら話す間、真司は独り言のように、ぼそぼそと呟きながら聞く。

「ダウン症？ 障害って……、中絶かあ……、育てる覚悟って、言われても……、普通の子供も、よく知らないのに……、中絶かあ……」

病院からの説明書類、そのうちの妊娠中期、中絶申請用紙を見ながら真司は呟く。

「今回は、諦めろって、事か……」

真司に伝えると、少しだけ気が軽くなった。けれど……

お腹の中には小さな命がある。今日だって、超音波で頭、胴体、それに小さな手足を確認してきた。その小さな命は今、生きている。それなのに、中絶するって……

——殺すって、事？

確かに今日の朝までとは違う、何か他のモノに変わったようには感じた。けれどそれでもやはり、お腹の中には赤ちゃんがいる。それなのに殺す？

彩は慌てて、尖った声で言った。

「生きているのよ。今も、ここに。ほら、動いている」

自分のお腹をなでながら言う彩の言葉に、真司も戸惑っている。

「そうだよな……でも、産むには覚悟がいるって……」

「覚悟って、何？ 検査なんかしなけりゃ良かった。生まれちゃったら、覚悟も何もあったもんじゃなかったのに」

「そりゃあそうだけど、もう、俺たちの赤ちゃん、はダウン症っていう障害を持っているって、分かってしまったしなあ……」

「だから、諦める？ それは結局、殺すってことよね」

「殺すって……」

長い沈黙のときが流れた。

「お腹の赤ちゃん、怒ってるだろうな……、殺すなんて、嫌だ……、でも……、分からない……」

独り言のように彩が言った。

決められない。互いに同じ思いが行ったり来たりしていた。彩は言葉にならない思いが浮かぶ。

——どうなるんだろう、私の赤ちゃん……。

自分で決断できない。

初めての妊娠で、「障害児です」と言われ、育てる覚悟だの何だのと言われ、覚悟を決める人は、いったい何組くらいいるのだろう。今回は諦めて、次の機会を待つだなんて、そんな簡単にはいかない。

自分も、真司も、両方の親たちも、この妊娠をどれほど喜んだことか——。

それなのに「諦めろ」だなんて、あまりにも酷い。考えると、また涙が溢れた。

「親父と母さんに、言わなくっちゃなんないのか……」

「えっ？ 言わないといけないの？」

「そりゃあ、まあ、黙ってる訳には、いかないだろうなあ」

「でも、、まだ……」

まだ、どうするか、決まっていないと、言おうとした。だが止まらない涙と鼻をティッシュで拭う間に、真司が言う。

「どうするか、決めても、言わないといけないのは、同じだしなあ」

確かにそうなのだろう。けれど、彩は何か腑に落ちないものを感じる。上手くはいえないのだが。

そもそも階下にいる義父母が苦手なのだ。いつも何かに苛立っているようで、楽しそうに話すところを見たことがない。それなのに、ここでまたショックを与えるような話をすれば、どうなるのか。そう思う反面、誰かにすがりたい気持ちもわいてくる。ふたりで決められないなら、下の義父母に頼るのも、仕方のないことなのか……。

おそらく真司も同じような気持ちなのだろう。そう思うことで納得した。

5 義父

促されて、彩はティシューの箱を抱え、ふたりに階下へ降りる。

下のリビングでは、義父母が揃って難しい顔つきのまま、バラエティー番組を見ていた。真司の「話がある」という言葉で振り返り、「何だ？」と訝しがりつつ、義父がリモコンでテレビを消した。

リビングと言っても、ソファがある訳ではない。いわゆる茶の間である。そこに大きな座卓が設えてあり、義父母はそこに向かい合って座っていた。テレビを消すのを見届けた真司は、キッチン側にある食卓テーブルの椅子に腰掛けた。隣に彩が腰掛けると、義父母も移動してきて、食事時のいつもの席に着く。

「何、どうした？」

義父の言葉を皮切りに、真司が事の次第を話し始めると、ふたりとも血の気が引いた青白い顔になった。時折、義母が、「えー、そんな」と小さく言い、泣いている彩を見ては、目を逸らす。

真司が話し終わると、皆が沈黙し、重苦しくよどんだ空気が漂った。

やがて、その沈黙の闇から、義父が手探りに、ゆっくりと声を出して言い始める。

「育てるのは、大変だろうなあ……。覚悟って、言ってもなあ……。障害を持っている子を、どうやって、育てるんだ？ 大きくなって、苛められでもしたら、かわいそうだしなあ……」

背中を丸め、うつむいたまま、「障害児があ……」とボソッとやった。

彩は何か罪を犯したような気分になった。その傍らで、「そうか、苛められることもあるのか」と義父の言葉に聞き入る。義父は生まれてくる子の祖父として、孫の不憫さに思いを馳せているのだろう、再度つぶやく。

「そうだと分かっている、産むことはないか……。苛められでもしたら、かわいそうだしなあ……」

そうやって、義父は独り言を言いながら、真司から聞いた内容を解した。そのあと、暫く考えるふうであった。

やがて、大きく息をすると、声の調子が変わり、丸めた背中も伸ばして、「子供は、また、出きるか……」と言った。そして思い切ったように言う。

「今回は諦めるか、なあ、真司、彩。子供は、また出来る。きっと出来る」

義父の言葉を待っていたかのように、その言葉を聞いた義母の言葉が続く。

「彩さんもショックだろうけど、生まれてきてからだったら、後戻りはできないのだしねえ、どうあっても育てていかないといけないのだしねえ」

彩は思い出したように涙が溢れるが、義母の言葉に押されるように、義父が力を込めた声が聞こえる。

「苛められでもしたら、かわいそうだ、今回は諦め。なっ、子供は、きっとまた出来る。なっ」

お腹の中にいる自分の赤ちゃんが、望まれない子供であると知り、哀しくて彩は泣いた。障害を持った子供であることが哀しくて涙。普通でないことが哀しくて――。哀しさで涙は、あとからあとから零れる。

本当に罪を犯したような気分だ。ちゃんとした赤ちゃんを身ごもらなかった罪。

この間、真司は終始、黙ったまま、一言も言葉を発していない。この恐ろしい決断から逃れたいかのように――。

決断に念を押すように、義父が言う。

「子供は、また出来る。それで良いよな、真司」

涙の向こうで、僅かに頷く青白い真司の横顔、その中にある、ほんの少しの安堵の色を、彩は見逃さなかった。

6 中絶

実家の母と義母に付き添われ、義父の運転する車で病院に向かう。午後の陽射しが窓から入ってきて、眩しいくらい良い天気、五月晴れである。お腹の赤ちゃんの処置を受けるというのに――。

1日入院の上、行う施術ということで病院に着いて直ぐ、入院手続きを済ませ、用意された病室に入る。看護師の指示で入院着に着替え、ふたりの母を病室に残し、彩ひとりが婦人科の診察室へと行く。

明日の手術に備え、子宮頸管拡張術という、子宮の入り口を広げるための処置を受けるためである。二ミリほどしかない子宮の入り口を、もう少し、三ミリほどに広げるため、挿入後に徐々に広がるスポンジのようなものを入れるのである。

スポンジを入れるとき担当医が、「少し痛みます。スポンジは十五分ほどで、ジェル状になりますから、そうしたら痛みはなくなります。それまで頑張ってくださいね」と、言う。

間もなく、生理痛のような痛みが、下腹部から腰周りを襲う。痛みを耐え、数分で処置は終わったものの、あまりの痛さで処置後も彩は立てない。看護師に支えられ、処置台から奥のベッドへと移り、痛みが治まるまで横になって思う。

――う、ツ、痛い！ ちくっ、とするだけかと思っていたのに……。

自分の浅はかさを悔いる。それでも、30分後には痛みも消え、またひとり歩いて病室に戻った。そこで待っていたふたりの母には、ひとりで大丈夫だからと帰ってもらう。

ひとりになると、涙が溢れた。痛みを耐えても、悲しみが残ることが、切ない。これが出産なら、痛みを耐えた分、喜びがある。けれど彩が耐えた痛みのあとには――。

夕食後、随分と経ってから、会社帰りの真司が病室に顔を見せる。朝、顔を合わせたのに、何だか久しぶりのような気がする。ほっとしたのだろう。

真司に余計な心配をさせたくはない。それに暗闇に落ち込みたくもないので、今日の施術の痛

みを彩は陽気に話す。少し、オーバー気味に――。

病院の消灯時間は早い。

明日の手術は朝、早い。明日、迎えに来る約束時間の確認をして真司は帰った。

眠りに着く前、思い出したように涙が溢れた――。

翌朝、看護師が体温やら血圧やらを測ったあと、膣座薬を膣内に挿入する。出産を誘発するのだそう。定期的に三回も挿入した。

暫くして、義父母と実母、それに真司がやって来た。その直ぐあとには、ストレッチャーを押した看護師が入ってきて言った。

「では、今から手術室に行きますので、こちらへ移ってください」

言われるままに、ストレッチャーへと移り、そのまま運ばれる。

手術室で、手術台に移ったあと、「では始めますね。痛くもなく、気付いたら終わっていますから」と、言い、麻酔医に全身麻酔を掛けられ、意識が遠のく。気が着いたら看護師の声がして、気が着きましたか？」

そこで真っ先に彩が思ったのは、あかちゃんがいなくなったんだということ――。

再びストレッチャーに、今度は彩の身体の下のシーツを、看護師四人が「せーのっ！」と掛け声を掛けて、持ち上げて移す。天井の蛍光灯が次々と足元へと流れるのを見ながら、病室に戻ると真司だけが待っていた。少し意識もはっきりとして、ここでのベッドへは身体を回転させ、転がるようにして自分で移る。落ち着いたところで、看護師が真司に向かって言う。

「あと少ししたら、飲み薬を持ってきます。先生も説明に来ます。そうしたら、帰っても良いですよ。じゃ、もう少しだけ、待っていてくださいね」

真司が応えると、看護師は出て行った。それを見届けたあと、真司が穏やかな声で言う。

「赤ちゃんを火葬にするため、親父の車で母さんたちも一緒に行ったよ。弔いは賑やかなほうが良いだろうって」

麻酔の残る彩は黙って頷く。聞きながら、他人事のように、別世界の出来事のようにも感じた。あまりにあっけない。

――こんなに簡単に赤ちゃんが居なくなってしまうなんて……。

前もって聞かされてはいた。そして本当に昼前には、帰された。

真司の運転する車で家に帰る。

家には皆が戻っていた。そして労いの言葉を掛けられ、部屋で休むように言われ、彩は何とも表現しづらい思いで、二階に上がった。ベッドに入ると、哀しいようでいて怒っているような奇妙な感情がわき、困惑しながら天井を見つめる。

――これが喪失感というものだんだろうか……？

昼食にと義母が作った卵とじうどんを、真司が運んできた。食欲はないが、朝から何も食べてはいない。ゆっくりと、うどんをすする。

7 悲嘆

翌朝、彩はベッドから出なかった。思い出したように、泣いたり、ただぼんやりして一日を過ごした。

次の日も、また次の日も――。

もう一ヶ月が経つが、一日のほとんどの時間をベッドで過ごしている。時折、這い出てテレビを点けてみるが、画面の中の喧騒が煩わしく感じられて、直ぐに消す。

最初の喪失感に加えて、罪悪感も首をもたげ、それが彩を責める。

真司は腫れ物に触るかのように、彩に接している。それがまた疎ましく感じたりもする。真司に責任がないことははっきりしているから、そんな自分が自分でイヤになる。

あれから、義父母とはご飯を一緒に食べていない。始めのうちは体調が良いなら、一緒に食べるようにと真司も勧めた。けれど真司のそんな言葉に対し、背を向ける彩。何とかしようと気を使った真司は、ある日、「何か欲しい物があれば、買って来てやるよ」と言ったのである。

彩には、渡りに舟であった。それから、朝、欲しいものを伝えれば、会社の帰りに買ってきてくれるようになった。

階下の義父母も同じで、彩には何も言わず、義母は彩の分の食事も用意してくれる。真司には何か言っているようなのだが――。

どうしても一緒には食べられない。一緒に食卓に着くところを想像するだけで、彩は寒気がする。罪を犯したような気持ちになるのが拭えない。それは赤ちゃんを死なせてしまった罪とは違う別の罪。そう、それは健常児を身ごもらなかった罪。

彩は二つの重罪を背負った気でいた。

家の嫁として、長男の嫁として、彩は罪の意識に苛まれ続けていた。だから心苦しくて、義父母の顔を見ながら食事をするのができないという、後ろ向きの感情に支配されていた。

何もしないで、ただ悲嘆にくれているうちに、二ヶ月、三ヶ月と時は過ぎていく。

真司の話によると、義父も「俺らの娘やと思うているから、何も心配しなくて良い。元気になるまでのんびりしていたら良い」と言っているらしい。

ひとつ屋根の下に暮らしながら、ほとんど下に下りない彩は義父母と顔を合わせない。お風呂に入るのも、階下が寝静まってからにしている。だから義父母の様子や言葉は、真司から聞くだけである。そんな彩でも、ふと自分の行動に思い至る。

流石に半年も経つと、階下から直接、義母が声を掛ける。「ご飯、出来たよー」とか、「お風呂、早く、入りなさいー」などと聞こえてくる。彩も気分の良いときには返事をする。

階下で顔を合わせることも、あるようにはなった。義母は働きにでることにしたらしい。「家に居てばかりも、つまらないしね」と、言ったその顔は、ほんの少しだけ楽しげに見えた。

そして初出勤のその日、「留守番している間は、鍵、開けないようにね。誰かが来ても、出な

くて良いよ」と、二階に向かって、下から声を掛ける。小さな子供に留守番をさせているときの
ような声掛けの義母。

彩は表通りを見通せる窓際に立った。自転車に跨り、パート先へと向かうその後ろ姿が、颯爽
として見える。

日に日に義母が明るくなったように思えるのは、化粧もちゃんとしているからというだけでは
ないだろう。

彩とは言えば、真司から預かったお金で、コンビニへお菓子を買に行き――。

だからこれは、完全な引きこもりではない。日曜日などはふたりで、大型ショッピングセンタ
ーへ買い物にも出かける。ふたりで洋服を選んだり、ふたりで遊ぶゲーム機を買ったりして、夕
食を済ませてくるときもある。

8 再起

悲しみに浸ってもおれない。これではいけないと彩も思う。

義母に倣って、外に出て働こうと、早速、面接に出かける。年も変わって、早、春の訪れをあ
ちこちに感じる三月。赤ちゃんがダメになってから、八ヶ月も過ぎていた。

それでも、まだ三十歳にはならない彩は、即日、採用される。

家から自転車で、二十分の場所にあるその会社は、電気関係の下請け業者である。数ある求人
広告の中からその会社を選んだのは、真司が電気関係の会社に勤めるエンジニアだからである。

そして、彩が住むこの地域には大手電気会社の工場があり、その下請け会社が結構ある。こん
な時代でも小物を作るその会社には、注文が多く入るらしい。小さな会社だが面接に行った際、
案内された作業場には、作業員が十数人いるのが見えた。ほとんどが中年過ぎの女たちのよう
である。

初出勤の日、女たちに教えられた仕事は、卓上電気スタンドの組み立てで、彩にとっては簡単
な作業だった。数人が同じ作業にあたるから、完成品が次々と並べられていく。

午前中の作業が終わり、昼の休憩時間になった。親切な先輩の女たちが数人で、彩を食堂へと
案内し、テーブルへと着かせる。親切心とお節介、無遠慮がセットになっていることを彩は知ら
ない。若い彩は、その類の女たちにとって、興味の的なのである。

「ここで食べたら良いよ」

ごり押しで彩を座らせ、自分達もその周りに陣取る。彩は言われるままそこに座り、外に出る
ことを義母が喜び、嬉々として作ってくれた弁当。それを広げ、一口食べた途端、太った先輩女
が唐突に訊いた。すでに女を廃業したかと思うほど、齢を重ねた女である。

「彩さん、子供は？」

彩はギョツとして、顔を上げると、他の廃業おんな達の目も一斉に彩に向けられていた。その
手の質問を受けるには、心の傷がまだ癒えてはいない。事の経過など話せる余裕はまだない。う
つむき加減に応える。

「はあ、まだ、いませんけど……」

廃業おんな達は彩の胸の内を知る由もなく、あちこちの口から言葉の矢が飛び出す。

「て、ことは、欲しいとは思っているんだ」

「なら、早く作ったほうが、絶対、良いよ」

「うん、若いうちに生んだほうが良いわよ」

彩の心がギリギリとざわめく。

廃業おんな達は、お構いなしに続ける。

「そうよ、何か、今、高齢出産だと、障害児の可能性が高いとか、何とか、言ってるじゃない」

「そう、だから、早く生んじやいなさい」

「そうよね、そうしたら、旦那さんも喜ぶし、早く帰ってくるしねえー」

廃業おんな達は口々に言う。沈む彩の気持ちを益々、海底深くへと沈めるのを楽しむかのように、別の廃業おんなが彩の顔をとらえて言う。

「ご両親も孫の抱ける日を、待ちわびてらっしゃるでしょう」

仕方なく、「ええ、まあ」と返す。その女は強張った彩の顔を見て、ため息まじりに言う。

「まあ、今の若い人は、子供より、自分達の楽しみを重視するのよね。でも、よくよく考えたほうが良いわよ。悪いことは言わないから」

周りの女たちが示し合わせたように、「そうそう」と、頷き合う。

ほんの少しの間、会話が途切れ、これで終わると思ったが、自分が幾つで初めての子を産んだのとかを、女たちは言い合った。聞きたくはないが、彩は少しだけ開放された気がした。

なおも女たちの話は続く。自分たちがいかに、子供に恵まれたかを自慢しあう。少なくとも彩にはそう聞こえた。それが出来の悪い息子、娘の話であったとしても。あっちに孫が何人だの、どこで何をしているだのと延々と続いた。それは彩にとって、心のかさぶたを突き刺すものだった。

そしてやっと、気の遠くなるような昼休みは終わった。

午後の作業には、もう一度、休憩時間があった。彩は廃業女たちから逃れるようにトイレに行った。そして、次の仕事が始まるまで、隠れていた。

――何で、こんなことしなくっちゃいけないの！

翌日、彩は出勤しなかった。一日中、何度も同じ言葉の独り言を呟く。

「ほんと、働くなんて、もうこりごり……」

家人の誰もが、外に出て働いている。だからと言って、家の掃除をしたりすることはないし、食事の仕度をすることもない。コンビニへ行く以外に、階下へ下りることもないし、誰かと話すこともない。

9 半分引きこもり

何もすることのない生活が日常化する。時間の経過が傷ついた心を癒してゆく。近頃は一日中、テレビを見て過ごしている。退屈だが、慣れれば平気で、何よりラクである。

外は怖い。家の中は安全。

彩は思う。

——これは、もしかしたら、引きこもりなのかも知れない。否、違う。家事だけはやっている。ならば、半分引きこもり？

家事、って言っても、せいぜい真司と自分の分、ほんの少しの洗濯をするくらいなのだが。それとて、真司はお風呂場で下着や靴下を脱いだら、すぐ傍の洗濯機へと放り込み、義母が自分たちの物と一緒にやってしまう。だから彩が真司の衣服で洗うのは、部屋で脱いだパジャマとワイシャツくらいの物である。

お風呂の準備も義母がやっていて、階下から、「早く、お風呂、入りなさい」と、叫ぶ声を聞き、渋々入るといった具合。

子供は、あれから三年が経つけれど、妊娠さえしてはいない。

彩は近頃、よく考える。——あの時、中絶なんかしたくない、産みたいとも言えなかった。不安ばかりが先立ち、産みたいとさえも思えなかった、と——。

それなのに、真司の言動を心で責める。——障害児、なんて考えたこともなく哀しみに包まれ、中絶という言葉でまた哀しくて、産んじゃいけないのって思ったら、ただただ泣けて……。真司は義父母に知らせるだけで……。

あの時——。

——たとえ障害があっても、俺たちの子供だ。何とかなるさ、とか？

——彩が産みたいなら、家族で力を合わせよう。そうすれば子供は守れる、とか？

——今、命がある子供は、俺たちの子だ。産めよ、彩、とか？

な——んて、言ってくれていたら……。たとえ、最後には中絶することになったとしても、そんな言葉のひとつやふたつはあって欲しかったと思う、今日この頃の彩である。

妊娠したには彩なのだから、もっとしっかりすれば良かったのだろう。今更、身勝手な思いである。だが、そう思っても仕方がない部分が、この家にはあるのかも知れない。

あれから三年経った今も、また障害児だったらと思うと、怖くて妊娠はできない。しっかりと避妊をしている。真司も同意している風で、コンドームを毎回きちんと着けている。そうなったらなっただ、子供という言葉がふたりの間から消えて久しい。

階下の義父母も口には出さない。普段の義父母は口数も少なげで、たまに声が聞こえれば、何かを言い合って口げんかをしている様子。だからなのか時折、義父のどでかい声がする。「さっさと、風呂、入れー！」苛立った声が響く。

義父は大工職人で、グループの頭である。身体も大きく声も大きい、気が短いところのある、いわゆる職人氣質。彩が結婚する前に亡くなった実家の父は、典型的なサラリーマンで、話す声も穏やかな人だった。比較すれば何から何まで、まったく違うタイプである。

障害児だということを父に話せば、「そうか、ふたりでよく話し合って決めなさい」と言っただろう。「お父さんたちは、お前たちが決めたことなら、協力するから」とも言ってくれたであ

ろうと、彩は思う。

大人だけのこの家族、何かが狂っていると、彩は思うようになった。会話の中から、肝心な何かが抜け落ちているように感じる。それは自分だけの思い過ごしなのだろうか？

真司は不自然だとは思わないらしい。何度か訊いてみたが、「何かおかしいの？」と、逆に訊き返された。

だからせめて、地雷を踏まないように、今日も彩は自堕落に生きる。これで良いはずはないの
だろうが、どうしようもない。これから先、この家族に幸せは来るのだろうか？

半分引きこもりの嫁がいる、この家族に……